



発行責任者: 歯学部長 宮崎 隆, 編集責任者: 広報委員長 井上 富雄
〒142-8555 東京都品川区旗の台1-5-8 TEL: 03-3784-8000
ホームページ: <http://www.showa-u.ac.jp>



21世紀の大学院へ向けて

歯学研究科運営委員会 委員長 上條 竜太郎

大学院歯学研究科の使命は、有為な歯学研究者を養成すると共に、先進的な知識・歯科医療技術を駆使して、より高度な研究を推進し、歯科医学のさらなる発展を期することです。本学歯学研究科は昭和58年に開設され、以来26年が経過しました。この間、幾多のすばらしい研究業績をあげ、国民の期待に応えてきました。このことは、これまでの博士(歯学)授与者数が、甲乙併せて740名にのぼること、そして文部科学省科学研究費補助金の採択金額が、私立歯学部のトップを堅持していることから明らかです。



現在我が国は少子・高齢化が進み口腔疾患構造は変化し、国民の歯科医療に対するニーズも高度化、多様化しています。21世紀は、介護・福祉が最重要項目となり歯科においても、QOLの向上やリハビリテーション分野への進出が求められています。これら国民の歯科医療に対するニーズの変化に適応するため、平成17年度、歯学研究科は文部科学省のハイテクリサーチセンターの選定を受け、「顎口腔機能障害の発症機序究明とその機能回復に関する先進的研究」と題するプロジェクトを開始しました。本プロジェクト選定を受けて歯学研究科は、講座を超えた研究協力体制を構築しました。そして顎口腔機能障害発症機序の解明、原因究明に基づいた診断・治療法の確立とリハビリテーション歯学の基盤構築・体系化に関する研究を推進してきました。本プロジェクトは本年度終了予定ですので、最終報告書の作成に向けて関係各位のご協力ご支援をお願い致します。

一方、本年4月の歯科病院診療科の一部改組に伴い、歯学部長直属診療科、ならびに歯科医学教育推進室が大学院の主科目を開講することとなり、来年度より大学院生の募集を開始致します。これにより、大学院歯学研究科の主科目の選択範囲が拡大され、大学院希望者により多彩な研究環境を提供できるようになります。

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社

会」の時代であるといわれています。歯学研究科を21世紀の知識基盤社会にふさわしい形に改め、学生の知的好奇心を満たす「魅力的な」研究教育機関とすることが、国民に対する私達の責務と考えます。

1年生4学部合同PBLが行なわれました

歯科医学教育推進室 片岡竜太

「チーム医療ができる医療人を養成する」ことを目的として、平成19年から、1年生約600名を対象に医、歯、薬、保健医療学部合同のPBLチュートリアルを行っています。600名の学生を8~9名ずつ69グループに分け、約25名の教員がファシリテータとして、PBLチュートリアルの助言、支援をします。1年生では前期に2つのシナリオ、後期に2つのシナリオを用いて、のべ11週間にわたってPBLを行います。このPBLには以下の3つの目的があります。1)問題は何かを明らかにし、問題への取り組み方を学ぶ。2)信頼がおける情報の検索法を身につけ、充実した自己学習ができるようにする。3)チーム医療ができる医療人になるためにコミュニケーション能力を身につける。また、PBLと同時に学部合同のコミュニケーション教育を通年で言い、コミュニケーションと情報検索、レポート作成などの教育を行っています。学生は全寮生活で寝食を共にしていますが、この4学部合同PBLは授業においても、学部の垣根を取り払うのに役立っていることが、アンケート結果からも伺えました。2年後に学生は3年生学部合同PBLでまた出会います。その時はそれぞれの学部で行われた専門教育の成果に、お互いに驚くこととなります。昨年のアンケート結果では、学部により患者への視点や知識が異なり、学部を越えてディスカッションをする楽しさと有用性がわかったという回答が多く見られました。

今回1年生のPBLチュートリアルで、香港大学教育学部博士課程の今福輪太郎先生が、本学と共同で、「PBLチュートリアルにおける学生の学習過程」の研究を開始しました。今回はPBLチュートリアルの見学と学生インタビューを行いました。この教育研究の成果は本学のPBLの充実のために活かされる事を確信しております。



平成21年度選択実習を終えて

選択実習小委員会 委員長 山本 松男

歯学部6年次に行う選択実習が必修科目として実施されるようになって、今回は4年目を迎えました。歯学部5年次での歯科病院における臨床実習を終え、6年次の総括講義がはじまるまでの期間に設定されています。一通りの学習、実習を終え、各自の興味・意欲によって積極的に勉強したいテーマを選んで勉強をするものです。積極的に取り組むものですから、内容だけに限らず、学外の施設に挑戦してもよいのです。学内の各教室、診療科で用意していただくプログラムも専門性が高まり内容の充実が図られてきました。一方、学外プログラムについては、希望人数、派遣先施設数も増加してきました。1プログラム2週間で学生一人2プログラムを選択します。

平成18年度 のべ216プログラム、

内訳(学内200, 学外(国内)15, 海外1)

平成19年度 のべ189プログラム、

内訳(学内155, 学外(国内)32, 海外2)

平成20年度 のべ208プログラム、

内訳(学内159, 学外(国内)48, 海外12)

そして本年度は のべ202プログラム、

内訳(学内159, 学外(国内)48, 海外5)

でありました。

当初は、超高齢社会を迎え、自らが考え、そして積極的に活動していけるような自立性と発展性、その基になる歯学部での学習内容がどの様に社会で役立っているのかを学ぶことを目標に掲げてスタートしました。また、学生一人一人で選択する内容が異なるため、特に学外での選択実習は社会人としての基本的な振る舞い、常識を改めて振り返るよい機会でもありました。

昨年、今年と歯科を取り巻く環境が一段と厳しいという報道が目につくようになりました。同時に、歯科医師過剰が再度クローズアップされました。しかし、世界でも例をみないスピードで高齢化の進む我が国において、本当に安心安全を担保した歯科医療が十分に提供されているのかといえ、必ずしもそうとは言い切れないのも、また事実です。日々の歯科診療の対象を広げるためにも関係医療者との連絡を密に、いわゆるチーム医療を展開していくことが一つの方策です。これからの歯科教育に求められるのは、安心で安全な医療を提供することのできる医療人を育てることであり、医療全体を視野に入れた上で歯科をとらえ、その実践の中で学ぶ臨床参加型の教育の実行です。

本学では既存の歯科科目の中での工夫に加えて、社会と歯科医療コース、オーラルフィジシャンコースな

どとならび、歯科臨床コースで低学年から歯科病院での相互実習形式を導入し、知識や技術が臨床を中心に体系的に理解しやすいように工夫をしています。選択実習はすでに4年目が終了しましたが、この臨床参加型の最終仕上げの一部として位置するようになってきました。

学生の報告でも発展的な理解の様子が多くなり、頼もしく感じています。急速に変化する社会での歯科医療を牽引することのできる資質を備えた歯科医師の教育に選択実習は役立つものと考えております。

選択実習プログラム実施にあたり、ご協力をいただきました先生方、関係諸氏にこの場を借りて御礼申し上げます。

天津医科大学でのD6選択実習

D6 35番 齋藤乃里子, 77番 春成文恵

私たちは5年生のポリクリ実習を終え、日本以外の医療現場を見て日本の医療との違いを知りたいと思い、天津医科大学での実習を選択しました。



天津医科大学歯科

病院では補綴科、保存科、口腔外科、インプラント科、歯周病科の外来を見学させていただきました。どの科を訪れても先生方、学生さんたちは親切で私たちが学びやすい環境を整えてくださいました。

また、今回の実習では大学の寮に宿泊し、天津医科大学の先生方や学生さんたちとともに行動することで中国の文化や思想も知ることができました。医療に関しては保険制度が普及していないことなどによるハンデキャップを感じましたが、治療に学生が積極的に参加する体制が整えられていること、先生と学生さんとの距離が日本よりも近いことを感じました。

滞在中の2週間、放課後はほとんど毎日、仲良くなった先生や学生さんが食事や遊びに連れて行ってくださいました。また、週末には担当の先生が北京旅行を計画して下さり、楽しい時間を過ごすことができました。

実習の目的は中国の医療現場を知ることでしたが、2週間、天津医科大学の方たちと共に生活を送ることで目的以上のものを得ることができたと実感しています。今まで、観光でしか海外を訪れたことがなかったため、その国に生活している人たちと密に話す機会はありませんでした。今回の実習を行って、国と国の違いについても多くのことを考えるきっかけになりました。また大学の実習の一環として他大学に実習に行くということに伴う責任も強く感じました。

このような機会を与えてくださいました天津医科大学ならびに本学の先生方に深く感謝申し上げます。

口から食育を考える

顎口腔疾患制御外科学教室 新谷 悟

7月3日に、講師に服部幸應先生をお招きして「口からの食育を考える」というテーマで講演会が開催されました。服部先生といえばTV番組にもよく出演しておられる料理家ですが、一方で食育基本法の制定に尽力された方でもあります。



「食育」の意味について、「食」という字は「人」に「良」と書き、それを育むのが、食育ですと服部先生はおっしゃっていました。食育には①安心・安心・健康な食事をするための選食力を養う、②食事を通じた躰で健全な心を育む、③地球の食を考える(日本では、食料自給率が国家の存続を揺るがすまで低くなっており、これを高めないといけないという現実があります)という3本柱があります。食事を通じた躰の低下が、最近の社会的凶悪事件などにも関係しているのではないかなど、非常にわかりやすくお話をして頂きました。また、インプラント治療や口腔内の味覚に付いても触れられ、「インプラントは噛みごたえの点でどうなのでしょう?」とか「舌で味を感じるのではなく、のどごしと言う表現で言われる様に上顎や咽頭で味を感じていることが多い」など、非常に興味深いお話も伺えました。

食事をとるのは口から。その口を診ている我々歯科医師は「食育」にもっと関わっていかなくてはならないのではないのでしょうか。講演後、活発な質疑応答も行われ、講演会は非常に盛況なうちに終了となりました。

教室紹介 歯科補綴学教室

歯科補綴学教室 馬場 一美

平成16年に冠橋義歯学教室と有床義歯学教室が統合され、現在の歯科補綴教室が生まれました。



当教室は冠橋義歯学、部分床義歯および全部床義歯学、すべての補綴系学科目を単独で担う国内で唯一の講座です。そのため、医局員が担う教育業務は非常に大きなものとなっていますが、一方では従来の細分化された学科枠をとりはらうことにより昭和ならではのユニークな教育が可能となります。就任直後に着手した、「臨床技能ベースの基礎実習」、「Webベースのコミュニケーション教育」、「臨床実習の充実」を柱とした3年計画の教育改革も教室員の

熱意に支えられ順調に進行しております。卒業教育についても、近年軽視されがちな技術教育を見直し、卒業研修システムを立ち上げ、診療技術トレーニングを必修化し「巧い」補綴医を育成しています。

臨床については、補綴科外来には1日平均で100名以上の来院患者がありますが、患者さまの多様なニーズに対応して、クラウン、プレート、インプラント、顎関節症を専門としてきた医局員それぞれの経験・専門性を生かしつつ、全体としての調和をとりながら補綴専門外来としての機能を営んでおります。また、歯科病院の御支援を頂き、新技術の導入が円滑に進んでおりますが、当教室から新たな技術を発信できる日も近いと思います。

研究内容は、インプラント・骨インターフェースについての分子生物学的研究から、歯の欠損、補綴治療の臨床判断に関する臨床研究まで多岐にわたりますが、学内のみならず、東京大学、東京医科歯科大学、NIMS、米国のミネソタ大学、UCLA、USCとの間で共同研究が進行中です。尚、現在、2名の医局員が米国留学中です。

早いもので、就任後1年8か月(平成21年7月現在)を経過しました。思い通りに行くことばかりではありませんが、すばらしい医局員に恵まれた幸運に感謝しつつ、前向きに、そしてクリエイティブに医局運営を行ってゆく所存です。

第29回昭和歯学会総会開催

歯内治療科 川中 岳雄

第29回昭和歯学会の当番教室として、口腔生理学教室、歯科医学教室推進室、歯内治療科、口腔リハビリテーション科、総合歯科、総合内科の計6教室、診療科から構成され今までとは違う合同当番開催となりました。

学会当日は、梅雨時期と言うこともあり天気がか心配でしたが、朝から晴れ、天候にも恵まれました。宮崎学会長の開会の辞で幕を開け、一般講演21演題、特別講演を含む大演題3題と若手の先生方からベテランの先生方までがとても関心のある発表をして下さり、時間の経過も忘れるほどの活気ある学会となりました。青柳隆夫先生には、1時間にわたる特別講演「日本における生体材料研究の進展」をしていただきました。岡野学会副会長の閉会の辞で幕を閉じ、無事に学会を終えることが出来ました。学会が無事終了し、大成功となったのも準備期間から私のお手伝いのご助言していただきました。他の教室、科の先生方、そして歯内治療の先生方のご協力があってこそと思っております。また関係者の皆様にご場をお借りして謹んで感謝の意を表します。



第22回国際小児歯科学会に参加して

小児成育歯科学教室 杉山 智美

6月17日から4日間
にわたり、ドイツ・ミュン
ヘンで行われた第22回
IAPD(国際小児歯科学
会)に参加いたしました。
IAPDは世界最大規模
の小児歯科学会であり



2年に1度開催されています。今回の会場は近隣に
美術館・大学などがある静かな地域であり、非常に勉
強に集中できる環境でした。発表は、基礎的なものも
多くありましたが、臨床に直結した「齲蝕処置」「外傷」
「咬合誘導」「予防」「障がい児への対応法」など多岐
に渡っており、非常にたくさんの勉強をすることができ
ました。

また、シンポジウムでは小児の虐待問題について
小児科医、小児歯科医の立場から適切な対応法・処
置法についての講演があり、小児を取り巻く環境の
複雑化・多様化・対応の難しさについて痛感し、この
ようなケースでは医師・歯科医師だけではなくたくさん
の業種の人がかかわる必要性について勉強することが
できました。昭和大学からは口腔衛生学教室の大
岡先生、小児成育歯科学教室の浅里先生、堀川先
生、杉山の合計4題の発表がありました。発表は緊
張しましたが、非常に良い経験になりました。

今後は、学会で学んだたくさんのご臨床で活かし、
より良い診療をするために今後も勉強していかなけ
ればいけないと思います。2年後の発表はオリンピッ
ク発祥の地ギリシャで行われます。臨床・研究共に研
鑽をつみ、成果を発表するために努力していきたいと
思います。

第17回国際歯顎顔面放射線学会議 に参加して

小児成育歯科学教室 浅里 仁

オランダ・アムステルダムの国際会議場にて、第17
回国際歯顎顔面放射線学会議が6月28日から7月2
日にわたって開催されました。大会長の Paul van der
Stelt 教授(Academic Center for Dentistry
Amsterdam)には昨年奈良で開催されたアジアの
放射線学会でお会いしておりましたので、久しぶりで
した。口演発表が95演題、ポスター発表が173演題、
参加者数は450名とのことでした。発表内容はう蝕
から顎関節、唾液腺に至る広範囲な画像診断、イン
プラントや矯正治療に関わる研究、さらに進化を遂げ
ている歯科用コーンビームCTを含む技術開発など非
常に多彩でした。日本からは23演題の発表があり、
昭和大学からは3題、放射線科の松田幸子先生は企業
と共同開発した被曝線量の測定具の特性とパノラマ
撮影における線量測定結果について、放射線科兼任

講師の池田昌平先生は荒木和之放射線科准教授ら
の基礎研究から近年商品化された tomosynthesis を
利用した断層装置による画像の臨床評価について、
そして私は放射線科と共同で行っている小照射野コ
ーンビームCTによる隣接面う蝕検出の精度について、
それぞれ発表しました。この学会には放射線科の専
門家だけではなく、口腔外科やインプラント外科の先
生方や画像解析ソフトの開発者なども参加してしま
したが、小児歯科からの参加はおそらく私だけでした。
こうした領域をまたがる学会に出席し、違った視点か
ら臨床をみることができたことや、分野の異なる他国
の先生方と交流できたことは貴重で有意義でした。学
会の後にはアムステルダムにある国立美術館やゴッホ
美術館などヨーロッパ芸術にふれることができ、貴重
な体験となりました。



行事予定

広報委員長 井上 富雄

- 8月 1日(土) : 歯学部オープンキャンパス
- 8月22日(土) : 歯学部オープンキャンパス
- 8月24日(月)～8月26日(水): PBLファシリテータ
養成・シナリオ作成ワークショップ
- 9月 5日(土) : 研修医採用試験
- 9月13日(日) : 歯学部オープンキャンパス

診療統計(平成21年6月分)

医事課長 久米 徳明

	患者数	1日平均	前月1日 平均	前年1日 平均
外来患者	19,306	742.5	679.9	709.9
入院患者	428	14.3	14.1	13.1

編集後記

小児成育歯科学教室 小田 訓子

歯学部だより7月号をお届けいたします。今年の梅
雨のように今号のお届けが遅くなりました。関係各位
および皆様方に大変ご迷惑をおかけし、誠に申し訳
ありませんでした。

天候不順な毎日ですが、夏休みになり、私が所属し
ます小児歯科の外来は雨や雷、日差しや熱帯夜にも
負けない子どもたちが連日来院して大にぎやかです。
私もこの元気を少しでも分けてもらって今年の夏を乗
り切りたいと思います。最後に夏のお忙しいところ、
今号にご執筆くださった先生方に御礼申し上げます。